

## 『春水』手稿発見余話

中里見, 敬  
九州大学大学院言語文化研究院 : 教授

<https://hdl.handle.net/2324/1932322>

---

出版情報 : Tongxue. 54, pp.20-21, 2017-10-05. 同学社  
バージョン :  
権利関係 :

## 『春水』手稿発見余話

中里見 敬

九州大学附属図書館の演文庫で長らく眠ったままになつていた謝冰心『春水』の自筆原稿が、執筆以来九五年来に姿を現した。中国新文学の幕開けを飾る詩集『春水』は、一九二三年に当時新潮社文芸叢書の主編を務めていた周作人の尽力により出版された。一九三九年に原稿は周作人から濱一衛（中国演劇研究者、元九大教授）に贈られ、濱没後の一九八七年、九大図書館に設立された演文庫に収められたのである。

その経緯を中国の学術誌『中国現代文学研究叢刊』二〇一七年第六期に発表するのにあわせて、九州大学広報室が記者発表会を設定し、新聞各社（西部本社版や福岡版）、NHK（地方ニュース）等で報道された。さらに中国の人民日報、台湾の中央通訊社なども配信して、ネットやSNSで多くの人がこのニュースを読んだらしい。中国文学の研究成果が一般向けに報道されることは少ないので、研究者として大変ありがたく

では、あつけないほどトントン拍子であつた。発見の真の功労者は有益な研究情報を提供された小川利康先生であり、感謝の念に堪えない。

ところで、人民日報の記事で「在学期間曾受教于一位来自中国大陆的老师，为他对祖国的赤子之情所感动，走上了研究中国文学的道路」という一文の「老师」とは、私の中国語の恩師・趙迺桂先生のことである。趙先生は終戦間際に北京から日本へ公費留学生として派遣され、そのまま戦後も日本に留まられた。帰国できなくなった胸中の無念はさぞやと思われるが、私が学生時代の趙先生は温顔を絶やさぬ大人然とした好々爺であつた。中国語の授業なのに、いつの間にか日本語で思ひ出話をされるのが常だつた。幼少時にお祭りで迷子になり、一晩外で過して翌朝帰宅すると、「少爺」がいなくなつたと大変な騒ぎになつて来たことなど、いまでも先生の話しぶりがありありと眼前に浮かぶ。先生の語る故郷の思ひ出はどれも美しく、恨み言を聞いたことはない。日本で幸せな家庭を築かれ、何ら後顧の憂いもなさそうに見えた趙先生だが、一度だけ自分のせいで姉か妹が文革中ひどい目に遭つたと

思っている。原稿発見から論文発表まで終始援助を惜しまれなかつた華東師範大学の潘世聖先生、追加取材でお世話になつた謝冰心研究の萩野脩二先生、周作人研究の小川利康先生には、特にお礼申し上げたい。

『春水』手稿の発見より前の二〇一六年十月、九州大学で「外国語週間」という学生向けのイベントが実施された。日本エッセイスト・クラブ賞を受賞してまもない作家・温又柔氏をお招きしたほか、様々な企画を集中的に開催することで、外国語学習の動機づけを高めようというねらいであつた。たまたま私がその実施責任者を務めることになり、SNSを使って広報することとなつた。Facebookによる情報発信が功を奏したかどうかはともかく、「外国語週間」は成功裏に幕を閉じた。私のFacebookもしばらく休止状態に戻ろうとしていた十二月、いつの間にか友達になつていた小川利康・早稲田大学教授のメッセージが目にとまつた。「なんと一九三九年の周作人の日記が初公開されました」というタイムラインである。周作人日記に記された『春水』の原稿を濱君に贈る」という一文から、演文庫で『春水』手稿の存在が確認されるま

話しかけたときには、涙声で後が続かなかつた。「車到山前必有路」、先生はこの格言を好んでしばしば使われた。きっとこの言葉を支えに、望郷の念を胸に秘めて、戦後の日本を生きてこられたのだと思つた。

なぜ三十年以上も前の恩師のことを、人民日報の取材でとつさに答えたのだろうか。濱先生の周作人に対する気持ちに——それは推測でしかないのだが——、いつの間にか私自身の趙先生に対する思いを重ねていたのかもしれない。濱先生は一九三四年から二年間の北京留学中、周作人邸に寄宿してお世話になつた。戦後ついに周先生に会つてお礼を言えなかつたことを、濱先生は終生悔いていたと、御息女よりうかがつた。実は、謝冰心も燕京大学で周作人の教えを受けた学生であり、周作人は教え子のために詩集の出版に尽力した。そして十数年後、かつて留学生だつた濱一衛に『春水』手稿本を贈つた。周作人、謝冰心、濱一衛、その後の三者三様の人生を思うとき、『春水』手稿本は我々に様々なことを語りかけてくれる周作人畢生の贈り物であつたように思われるのである。

（九州大学教授）